

私のフィールド

県都に残る水鳥のオアシス

吉井 進

休日を利用し、望遠鏡を片手に、大きくなった2人の子供とこの湖を歩くことがすきだ。きらめく湖水のひろがるなか午後の鳥屋野潟は、いっぱい陽をかかえ静まりかえっている。水面に採食し、あるものはたえず水鳥たちのシルエットは、時おり音もなく水のわをひろげ青空がゆれた。

もうすぐ北へ向かう旅する鳥たちとそばのふくらみかけた木々の芽吹きが目につり、小学3年になる我が子の姿と交差した時、少年の頃の四季と湖がいっぱいに描き脳裏を流れた。

私の少年期のそこは、鳥屋野潟をはじめ蓮潟、男池、三平池などほか大小様々な池があり、そこでゆれる波がオレンジ色にそまるまで夕暮れまで時をすごしたものだ。

かつて湖水をふちどり一面に続くヨシの原でパンやヒクイナの巣や卵を友達とさがした。背たけの2倍以上もある水辺を上下に浮き沈みしながらかきわけ、自然の不思議さはあくことなく語りかけ、包んでくれた。

コアジサシが青空の雲とともにうかび、水面にダイビングする頃、仲間とこの湖に水しぶきをあげた。水はコアジサシのそれと同じく夏の強い日射しをてりかえし ガラスがく



だけのようにキラキラと飛び散った。

潟の北側（現桜木町）から東岸清五郎までの長い水面を往復して泳ぐと大人になったような気持になったものだった。潟の中央の水の中でみる新潟市は緑色にゆれ、その向こうに小さな家並みがヨシのゆれるにあわせ遠慮がちに見えた。

そのむかしと今も変わらず夏鳥のオオヨシキリ、カッコウはやってくるが、緑と青空色の湖の景色は消えた。少年の頃歩いた湖を今は親と子が歩いている。生物が織なす四季の風物詩は、遠い未来まで心の中で生きつづけるであろう。やがて冬をすごした水鳥たちが春を残して遠い北国へ旅立つのももうすぐだ。

混群の思わく——我道を行くか、かすめ取るか

上越教育大学

中 村 登 流

カラ類の混群

いくつかの異なる種の鳥が集って一つの群れを作っている場合を混群と呼んでいる。ちょっとした里山を歩くと、シジュウカラやヤマガラ、エナガなどの混群によく出会う。これをカラ類の混群と言っている。非繁殖期にはこれらの鳥が騒々しく鳴きかわしながら流して行くので、目立つこともあって、野鳥観察家の間で知らない人はないだろう。たいていはエナガとシジュウカラが中心になっていてそれにヤマガラやコガラ、あるいはヒガラがまじり、コゲラ、アカゲラなどのキツツキと一緒にいることが多い。それに、キクイタダキとかウグイスも入っている。ま夏や秋にはコサメビタキとかサンコウチョウ、センダイムシクイやメボソムシクイなどが加わっていることが多い。森の中の主要な小鳥が集ってしまうので、非繁殖期の林は、こういう混群に出会わない限り、鳥がいないのではないかと思うほど静かな印象を持つ。

何よりも冬の上麓に多い鳥はエナガとシジュウカラだろう。混群の種類組成としても、この2種の組みあわせが一番多い。山里の林はすっかり人工林化し、およそ原生林のおもかげも無いが、こういう林の中で、もっとも成功している鳥といってもよいかもしれない。ところが、このエナガとシジュウカラの群れを少し追跡して見てすぐ気づくことがある。混群というのは離れたり会合したりをくりかえして、常時べったりと結びついているわけではないということだ。都合によって結合しているのであって、ただ漫然と一緒にいるというものではないらしい。特にエ

ナガの態度ははっきりしていて、自分達だけの群れの結束がかたく、他の種のごちまぜの集団などまるで意に介することなく、独自の行動をしている。早い話が、自分達だけの交信をかわして、さっさと移動してしまう。常に他の種などの存在におかまいなしに、我道を行くという態度である。

他方シジュウカラを見ていると、エナガにくっついて行こうとする態度が見られる。くっついて行こうというだけのものではないことは、もう少し注意して観察すると解って来るだろう。エナガが枝の上になにか見つけたようなそぶりをしようものなら、シジュウカラが異様に接近してきて、そのエナガを追いはらう。そして、エナガのねらっていたあたりを探す。そこでうまく食物に出会うこともあれば、結局は解らなくて終ることもある。例えば、混群の中で、それぞれの種類が、他の種類に接近して、追いはらっているような場所とりの例を調べてみる。エナガとシジュウカラの関係では、一方的にシジュウカラがエナガの枝取り(所場取り)をしていて、エナガがシジュウカラを追い立てることはない。それだけでなくシジュウカラはまわりの別の種の鳥に一番興味を持っていることが解る。もちろんシジュウカラは自分でも食物を探す。しかし、その時間をさいて、他の鳥の食物をうばおうとする。ヒガラに対してもコガラに対しても食べようとする場所の場所取りをするが、エナガはヒガラやコガラにもやられてしかもやりかえす様子はない。食物に関して我が道を行くというのがエナガであり、その近くへ行って、あわよくばかすめ取ろうと



えさをついばむヒガラ

するのがシジュウカラやヒガラ、コガラである。そして後者のグループの中ではシジュウカラがもっともそれをやるメンバーだ。

共通の目的があれば混群はできるわけだが例えば松の実が大量にできれば、ヒガラだけでなく、シジュウカラもコガラもそこへ集まって来て事実上混群状態になる。しかし、それだけでは同一の群れというには弱い。例えば区別をつけることがむずかしいとしても、もっと強い結集力、他の種類そのものが吸引力となっているような結集力がないと混群とは言にくい。この場合、種間に起る種々の行動観察が重要となってくる。松の実のような食物として鳥とは別にあるキノへの吸引力ではなく、松の実をねらっている仲間とか他種の鳥のその個体への吸引という点に注意する必要がある。

カラ類に対するヒタキ類

所で、混群の中にまじっているヒタキ類やムシクイ類は、たいてい混群の後半にいる。これらの鳥は飛んでいる虫とか、葉や枝の下側にいる虫にとびついてとって食う鳥達だ。ヒタキ類のことを英名ではフライキャッチャーという。ヒタキ類の独特の虫のとかたをフライキャッチングというが、飛んでいる虫へ向って、空中へおどり出しながらくちばしを近づけて、空中でばくりとくわえとるやりかたのことだ。これがカラ類とはかなりちがったやり方であることは、コサメビタキなど

見守ったことのある人なら、すぐにうなずけるだろう。見とおしのよい枝からまわりの空中を見まわして、飛んでいる虫を探す。そして、見つかる则ち翼をつかかって襲撃する。よく見ているとムシクイ類もその方法で飛びつくタイプの鳥だということが解る。カラ類が全くそうしないというわけではないがあんまりその方法はとらない。もっぱら足でかせいで、すき間をのぞいたり、ものをとり除いてみたりしていく。あれやこれやといろいろの方法をやらずに、とにかくも探しまわり、つつきまわして、ほじり出していく。わきめもふらずにそれをやっていけば、彼等の目の前や、足もとから、ぱっと飛び立って逃げる虫があるだろう。それはかまえていないととれないすばやさで、空中へと逃げてしまう。混群にまじっているヒタキ類とかムシクイ類はそれがねらいなのだ。だからこの場合カラ類はせっせと我道を行くのであり、ヒタキ類とムシクイ類は、その後方からつき従ってうまくやろうというわけである。カラ類はいわば、たくまざる勢子である。牛は草を食いながら、青虫もいっしょに食ってしまうだろう。そして歩いて、尾をふればバッタととび出すだろう。牛には青虫もバッタなども目じゃないし、意味もない。だがアマサギにとっては、そのバッタの方にはずっと興味がある。そのために牛に興味を持つことになる。こういう食いかた、そしてそういう意味でできてくる動物の種間関係には、動物群集構成の一つの原因を含む意味があるだろう。

何羽かのウミネコが円を描いて舞いおり、飛び立っては舞いおりて水に浮くところ、そこを探していくと、たいていウミスズメが見つかる。ウミスズメが魚群をまるめていると上空からウミネコがおおりて来て横取りをする図式だ。しかしカモメの大群にトウゾクカモメがつきまとって襲いかかっている。この略奪の構図もまた、他種へ興味を持つ鳥達の世界の一つの極端だろう。

栗ヶ岳の野鳥 (1950以降)

科名	種名()内参考資料	科名	種名()内参考資料	
1. カイツブリ	①カイツブリ	17. セキレイ	④①セキレイ	
2. サギ	②ミゾゴイ		④②ハクセキレイ	
3. ガンカモ	③カルガモ		④③セグロセキレイ	
4. ワシタカ	④ミサゴ (稀)		④④ビンズイ	
	⑤ハチクマ (営巣記録あり)		18. サンショウクイ	④⑤サンショウクイ
	⑥トビ		19. ヒヨドリ	④⑥ヒヨドリ
	⑦オオタカ (営巣記録あり)		20. モズ	④⑦モズ
	⑧ハイタカ		21. カワガラス	④⑧カワガラス
	⑨ツミ		22. ミソサザイ	④⑨ミソサザイ (営巣記録あり)
	⑩ノスリ		23. ヒタキ (ツグミ亜科)	⑤⑩コルリ
	⑪サンバ (山麓に営巣)	⑤⑪トラツグミ		
	⑫イヌワシ (営巣記録あり)	⑤⑫クロツグミ		
	5. ハヤブサ	⑬ハヤブサ	(ウグイス亜科)	⑤⑬ツグミ
6. キジ	⑭ヤマドリ	⑤⑭ヤブサメ		
	⑮キジ	⑤⑮ウグイス		
7. チドリ	⑯イカルチドリ (川原に巣)	(ヒタキ亜科)	⑤⑯センダイムシクイ	
8. シギ	⑰イソシギ (川原に営巣)		⑤⑰キクイタダキ	
	⑱ヤマシギ		⑤⑱キビタキ	
9. ハト	⑲キジバト	(カササギヒタキ亜科)	⑤⑲オオルリ	
	⑳アオバト		⑤⑳コサメビタキ	
10. ホトトギス	㉑ジウイチ (山奥で)		㉑①サンコウチョウ	
	㉒カッコウ (山麓の農耕地)	24. エナガ	⑥②エナガ	
	㉓ツツドリ	25. シジュウカラ	⑥③ヒガラ	
	㉔ホトトギス		⑥④ヤマガラ	
11. フクロウ	㉕コミミズク		⑥⑤シジュウカラ	
	㉖コノハズク	26. メジロ	⑥⑥メジロ	
	㉗アオバズク	27. ホホジロ	⑥⑦ホホジロ	
	㉘フクロウ		⑥⑧カシラダカ	
12. ヨタカ	㉙ヨタカ		⑥⑨アオジ	
13. アマツバメ	⑳⑩ハリオアマツバメ		⑥⑩クロジ	
	㉑⑪アマツバメ	28. アトリ	⑥⑪カワラヒワ	
14. カワセミ	㉒⑫ヤマセミ (川岸の崖に巣穴)		⑥⑫ウソ	
	㉓⑬アカシヨウビン		⑥⑬シメ	
	㉔⑭カワセミ		29. ハタオリドリ	⑥⑭スズメ
15. キツツキ	㉕⑮アオゲラ	30. ムクドリ	⑥⑮ムクドリ	
	㉖⑯クマゲラ (稀)		31. カラス	⑥⑯カケス
	㉗⑰アカゲラ	⑥⑰ホンガラス (通称栗庭で1964年 坪谷氏初観察)		
	㉘⑱コゲラ	⑥⑱ハンボソガラス		
16. ツバメ	㉙⑲ツバメ		⑥⑲ハンブトガラス	
	㉚⑳イワツバメ			

この目録は、昭和25年(1950)以降、栗ヶ岳およびその周辺で観察された野鳥をまとめたもので、現在では見られなくなった種類も含まれている。反対に、観察不十分(特に冬季)のため、記録洩れのものもあると思う。周囲の状況から生息していると推測される未確認種として、次の野鳥があげられる。

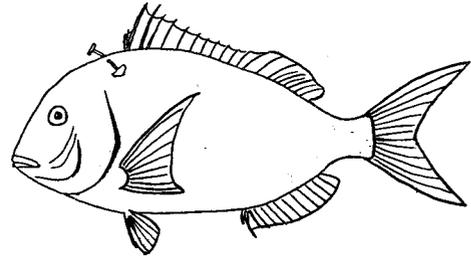
- ゴイサギ ○オンドリ ○クマタカ ○クイナ ○オオアカゲラ ○チゴモズ ○ルリビタキ
○シロハラ ○メボソ ○エゾムシクイ ○コガラ ○ゴジュウカラ ○ノジコ ○マヒワ
○イカル

これら15種を追加し、他に予想される鳥を考え合わせると、栗ヶ岳(およびその周辺)の野鳥は100種を下らないと思う。

サカナ—移動を調べる

新潟県水産試験場

岡田 成 弘



アンカータグを付けたマダイ

魚は昔から重要な蛋白源として、我々の食生活と深い関わりをもってきました。

しかし近年は、漁具や漁法の改良、漁船のパワーアップ・過密化などによって再生産のバランスが崩れ、資源の減少が叫ばれています。魚を保護し資源を維持するためには、産卵場や幼・稚魚の育成場を保護したり、適量の漁獲を行うことが必要です。けれど海の中は、陸上と異なり直接目で見ることが困難なため、状況を把握することができず、どうしても網や釣り等によって漁獲されたものについて調査することが中心となってしまいます。そのため、必要なデータが不足しがちになります。それらを補うための方法として、以前から標識放流というものが行われています。これは鳥におけるバンディングと同様で網等で捕獲した魚に、番号の書いてある標識（タグ）を付け、その魚の体長・体重・性別等を記録した後に再び放流する方法です。標識には何種類ありますが、素早く多量に付けることが可能なアンカータグという標識が広く用いられています。これは、スーパー等で2足1組で売られているくつ下を止めているプラスチックのものと全く同じもので、専用のガンで打ちつけます。他には、円盤型の丸タグやチューブ型のタグ等がありますが、いずれにしても魚体の一部に傷を負わせねばならず、少なからず影響が出ていると思います。しかし魚を水からあげている間に素早くタグを取り付け、さらに捕獲された際人の目につきやすくなくてはいけない等の理由から、今の技術ではしかたありませんが今後改良すべき点で、これに関しては鳥における技術の方が進んでいると思います。

移動、成長を続けていた標識魚が再捕された時に、放流時と同じ項目について測定を行い、集まったデータを解析することによってその魚種の移動範囲・成長率・寿命等を算出することができます。その結果、大変興味深いことがわかる時もあります。例えば、底にいる魚の代表で、あまり移動しないのではと考えられていたヒラメが、2か月あまりで新潟沖から富山湾まで移動していたり、ウスメバルという魚（中・下越ではハチメ、上越ではセイカイと呼んでいる赤い魚）では、放流した場所と全く同じ所で5年後に再捕されたり、刺網による調査の時に、標識番号のつながっている個体が続けて捕獲されたこともあります。

この様に標識放流は魚の移動等を調べる上で有効な方法ですが、短時間の移動等を調べるには不向きです。それを補うために、最近ではバイオテレメトリー法という方法が用いられています。これは、水中で超音波を発信する小型装置を魚に取り付け、受信機を積んだ船で追跡する方法で、陸上の動物によく用いられているものです。これにより、魚の日周移動・移動水深・水温等を調べることができ標識放流で得ることのできなかったことを調べることが可能です。

海の中は未だ知られていないことが多くあり、これからもいろいろな方法で調べられてゆくことと思います。標識放流はこれからも行われます。もしかすると、初冬の河口で、黄色い標識をつけたサケが元気に川をのぼっていく姿が見られるかもしれませんよ。



オオヨシキリの巣と雛

鳥との出会い

小林 伸 幸

野鳥に親しみを覚えたのはいつの頃だったろうか。幼ない頃から兄の影響で野鳥がたまらなく好きだった。又兄も叔父の影響で鳥好きになったという。

そんな私が昨年6月、オオヨシキリの営巣を観察した。人の背丈以上もあるヨシ原にブラインドを張っていると、もうすでに私の目の前にその愛らしい姿を現わしている。こんなに早く現われるなんて、もうすぐに友達になったような気がして夢中でレンズの中をのぞき込む。

ヒナは全部で5羽、まだ何れもあどけない顔をしている。エサはアオムシ、ハネムシ、時にはガのような物等で3～4分間隔で運んで来る。ヨシ原の間からササッと巣の上に来るとパッとエサをやる、アッという間の出来事だ。そして巣の中を窺いフンを除いてヨシ

の間に消えて行く。時には飛び去って行く。驚いた事に親がそのフンを食べてしまう事もあるようだ。

ヒナも徐々に成長し、さしずめ離乳食であろうか、やけにトンボが多くなって来る。さすがに一口では食べきれず嘴をパクパクさせている。その様子を親鳥は眺め、又次のエサを探しに行く。

空は限りなく蒼く、日差しはもう夏の日のように肌を突き刺してくる。ヨシ原の間をさわやかな風がすりぬけて、まるで揺り籠のように巣を揺らす。しかしヒナたちは、親鳥が親鳥がエサを運んで来たものと思い、黄色い嘴を精一杯広げ、伸び上がって待っている。

こんな光景を見て、5月に生まれた子供の事を思い出し、この5羽のヒナも我が子のように愛しく思えてきた。

今、あなたはどんな鳥が好きですかと聞かれたら、ギョギョシ、ギョギョシと忙しく囁る、オオヨシキリが大好きです。と答えるだろう。

ムクドリの生活

小池重人
石部 久

1. はじめに

ムクドリは私達に最も身近な鳥のひとつである。しかし体色や囀りが地味な故に意外と興味を持たれていない。けれども身近に非常に多く棲息していることは鳥の生活や生物の生態を知る上で好適な対象と言える。また、地味な鳥といっても、なぜ地味なのか、なぜそういった進化をしてきたのかという問題を考えていけば、そのことが重要な意味を持ってくる。それに彼らは営巣場所を樹洞に依存しているので巣箱を架設することによってその中の様子を自由に調べることができ、写真やビデオなどの記録を添えれば良い教材となる。私達は以前から生物教育や科学研究指導に興味を持っていたので、以上のような理由から、最もやりやすい対象としてムクドリの生活を調べることにした。

2. ムクドリの世界

ムクドリの仲間は世界のどこにどのくらいいるのだろうか。いくつかの文献を調べてみた。Feare (1984), Gruison (1976) によれば、全世界のムクドリ科は24属106種からなっており、図-1のように東南アジアの島々、ユーラシア大陸、アメリカ大陸などに生息している。ムクドリ科の種が最も多く棲む

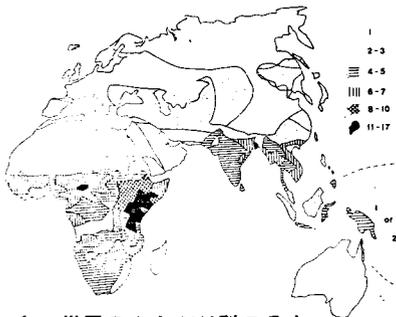


図-1 世界のムクドリ科の分布
(数字は各地における種数)

アフリカでは、主にテリムクドリ類と呼ばれるチャバネテリムク属・マキエテリムク属・ゴシキテリムク属など8~9属が生息している。ヨーロッパからアジアの島々にかけて生息しているのは主にムクドリ属で図-2のような地域に16種分布しており東南アジアに多い。その中で最も生態がよく研究されているのはヨーロッパに普通に棲息しているホシムクドリで、この鳥は北アメリカなどにも移入され分布を拡げている。(Terres 1980)。リ日本ではコムクドリとムクドリの二種が繁殖しており、コムクドリについては牛山(1966)、小池(1981)の研究がある。ムクドリについては黒田(1982など)、などの関東平野における研究がある。しかし、多雪地帯におけるムクドリの研究はまだ充分行われていない。ここで述べることは1984年4月より1年間ムクドリの生態について予備的な調査をしたものをまとめたものである。

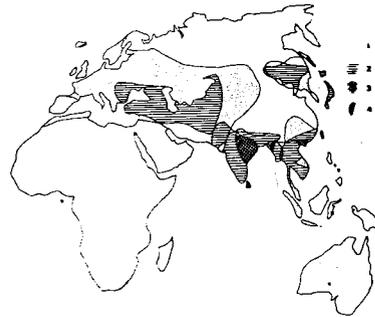


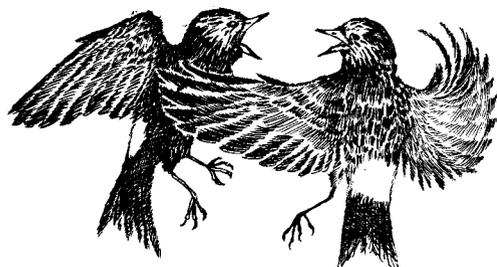
図-2 世界のムクドリ属の分布

3. 繁殖期

ムクドリは1羽の雄と1羽の雌が番になって春から夏にかけて1回か2回営巣繁殖する。番形成の時期は精確にはわかっていないが2-3月の穏やかな日の朝に2羽で軒下や電線にとまり囀りや巣穴のぞきをしているのが観察されるので、実際の営巣のはるか以前に行われている可能性が強い。このことについては現在標識して研究中である。

春4月雪が消え田や畑にヨモギやハコベなどの草花が伸び出す頃に、冬の間は餌場ではただの群であった集団の中に明らかに番とわ

かる行動をとりはじめる。他の番から1 m程の距離をおいて2羽はよりそい、時折雌は嘴を上にあげ細い声で囀る。また少し翼を下げ白い腰を見せるようにして雌のまわりをまわったりする。そういった繁殖に関する一連の行動が4月の田畑では見られる。



ちょうどその頃、人家の軒下や樹洞、研究用に架けた巣箱の近くで雄が囀ったり営巣場所をめぐる番どうして争う姿がみられる。争いは雄どうしだけでなく、雌もくわわり雄の後に雌がついてお互いに嘴を大きく開きギャーギャーと威嚇する（図-3）。それで勝負がつかない場合はとっくみ合いにまで発展し地上に落下することさえある。占有した場所に他の個体や番が飛来したときはすぐに突進して追い払う。営巣場所を占有した個体は次に巣の中に巣材を入れ始める。1984年に初めて観察した巣材はこびは4月20日であった。実際巣の中に巣材が入っていたのを記録したのは4月21日で巣箱の中であった。巣箱は黒崎中学校で3個、青山の林で8個、鳥屋野潟で12個架けた。青山での巣箱の利用状況を調べてみると、4月21日にはA-3の巣箱で80%、A-4で50%、他は10%の巣材が入っていた。雄も雌も巣材を運び入れ、巣材として枯れ草、枯れ葉、鳥の羽毛、ビニールのひもなどをもってくる。巣箱の奥の方には卵を産み抱卵するための産座のくぼみをつくる。青山で実際使用したのはA-1・3・5・6の巣箱で4月下旬に1例、5月上旬に3例が初卵を産んだ。鳥屋野潟では5月上旬に1例だけ産卵した。卵数は5卵が2例、6卵が2例

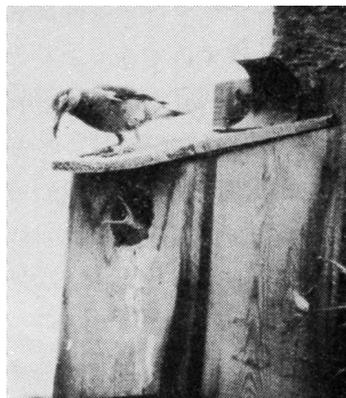


図-4 巢内の雛に給餌する雌親

7卵が1例で平均5.8卵であった。卵の色は薄い空色で大きさは $25.9 \times 18.6 \text{ mm}$ 、 4.9 g ($N=1$)であった。抱卵は雄と雌と共同で行ったが夜間は雌だけが行っているらしい。約2週間後目のあかない丸裸の雛がかえりチーチー鳴きながら餌ねだりを始める。親鳥は雄も雌も巣から数百m離れた田畑へ行き、ケラ、ミミズ、アマガエル、ガなどを採ってきて雛に給餌した（図-4）。黒崎中学校で標識した屋根裏で営巣したP-14という個体は巣から300-400m離れた畑からよく餌を採ってきた。ふ化してから巣立ちするまで鳥屋野潟の例で20日かかった。6月に入ると巣立ちした親子群が他の親子群と群れて田や畑・林の地上で採食する。この時期、雛の餌ねだりの声で群は非常にさわがしい。しかし親子群といっても、雄も雌も一つの群となっているかはまだよくわかっていない。しばらくすると巣立ち雛たちは親から離れ幼鳥だけの群をつくる。群の大きさは30~100羽ぐらいと思われる。幼鳥は羽色が薄く特徴的なので成鳥とすぐに区別がつく。幼鳥を手放した成鳥も数十羽の群をつくるが、2羽の番でいることもあるので、2回目繁殖か、あるいはそうでなくても番だけで生活しているものがあるのかもしれない。少なくとも9月から10月の換羽の時期までは成鳥と幼鳥は昼間別々の群で生活していることは明らかである。しかし秋の換羽後、外見からは幼成鳥の区別は困難になるので、その後の生活様式の違いについてはまだよくわかっていない。

4. 非繁殖期と塒

ムクドリは非繁殖期に大規模な塒をつくる。しかしその規模や場所は季節によって変動がある。春4月黒崎町の河原でみられた塒は200-300羽程で、川沿いの畑で日没前に群で採食した後日没とともにすぐ脇の竹ヤブに移り暗くなるまでざわついていた。繁殖し雛を育てる頃になるとそういった集団塒は目につかなくなるが、6月に雛が巣立つ頃になると塒に入る大きな群が日没前に毎日決まったルートを通り過ぎていくのを見ることができるようになる。

実際そういった大きな集団塒を調査したのは7月の下旬で、黒崎町緒立部落の電線に鈴成りになった数千羽の群を発見してからであった。その後7月31日にはその詳しい状況を調査した。それによると5時30分頃から各地から群がこの部落に集まり始め電線にとまったり、田畑に下りたりしてしばらくすずす。それから30分程してそれらの群の一部が東へ約1kmのアシ原へ移動し塒入りを始め、日没に近づくとつれにその数が増加した。日没15分後には全ての個体6180羽がアシ原へ移動し塒入りした。この日の日没は6時53分だったので、前後を15分毎にまとめてみると、日没前後15分内に大部分の鳥が塒への移動を行っていることがわかった。(表-1)

時間	群数	個体数	1群あたりの個体数 個/群
5:54-6:08	1	1	1
6:09-6:23	3	42	14
6:24-6:38	11	675	61
6:39-6:53	26	2835	109
6:54-7:08	38	2633	69
計	79	6186	78

(日没時刻 6:53)

表-1 15分毎の塒入り個体数

(1984年7月31日、黒崎町のアシ原での記録)

このようにムクドリは夕方に近づくと塒から少し離れた場所で「塒入り前集合(図-5)」を行いそこから塒へ入ることがわかった。塒入りした後暗くなるまでギャーギャーと鳴き

さわいだりアシの上をなでるように群飛したりしてざわついていた。私達はこういった塒を他に数ヶ所発見し、ムクドリの毎日の移動距離を調べたが最も遠い所で10km程であった。塒に利用する場所はアシ原や広葉樹の並木、竹ヤブなどであった。塒についた群は、翌日出直前に一斉に飛び立ち、一気に自分達の採食地へ向けて飛んでいく。そしてまた1日の群を単位とした生活が始まる。非繁殖期の生活はそのほとんどが採食と休息に使われ、田や畑で昆虫やミミズなどを、樹上で柿やタゴの実などを採食する。また休息には村落のケヤキの木などがよく利用される。これらの群は夕方に近づくとつれに他の群と集合したりしてにぎやかに塒近くへ移動する。

私達はこの時期の生活に関して非常に興味深いことを発見しているが、今後もっと詳細な調査研究をした上で紹介したいと思っている。



参考文献

- Feare, C. 1984. The Starling. Oxford
 Grunson, E.S. 1976. A Checklist of the birds of the world. Collins.
 羽田健三・牛山英彦, 1976. コムクドリの生活史に関する研究, 日生態会誌 15(5): 255-235
 小池重人, 1981. コムクドリの育雛について, 新潟県支部報
 黒田長久, 1982. 鳥類生態学 出版科学総合研究所
 Terres, J.K. 1980. The Audubon Society Encyclopedia of North American birds. Alfred A.Knopf

寺泊探鳥会 日本海厳冬探鳥会

事務局報告

恒例となった日本海厳冬探鳥会が去る2月10日寺泊で行われました。

当日は雪こそ降っていませんでしたが、朝から大変寒く また風がとても強く、厳冬という言葉通りの天候でした。

午前10時、観察の前に説明会が行われ、冬期の寺泊港付近の鳥相と、カモメ類の識別のしかたについてわかりやすい説明が渡辺弘雄先生よりありました。さらに「今日の様に風の強い日は、沖にいる鳥達が風を避けるため港内に入ってくるので、絶好の探鳥日和りです」と説明され、皆張切って寺泊港へ向かいました。

港に着き双眼鏡で見渡すと、防波堤を越えてくる波をかぶりながら群れているカモ達を見つけました。さらにフィールドスコープで拡大してみると、100羽近いマガモの群れと、それより少し手前に、山吹色の嘴が目立つ小柄なクロガモ、目の下の白斑がユーモラスな表情に見えるビロードキンクロがそれぞれ小群を作って泳いでいました。また少し離れた所では、ペアのシノリガモや、波間に見え隠れするカイツブリの仲間も見られました。カモやカイツブリの仲間を十分に観察した後今度は、カモメの仲間が多いといわれている出雲崎港へ車で向かいました。港の手前のテトラポットでは、羽を休めているウミウの群れと、ウミネコ・セグロカモメ・オオセグロカモメの混群を間近に観察することができ、じっくりと比較・識別を行いました。港内では泳ぐウミアイサを観察し、さらに寺泊港へ戻る途中では、シロカモメ・ミツユビカモメなども出現して、厳冬の海鳥達が満喫することができました。



昼食後は、観察した鳥について説明が行われ、あわせて羽数・雌雄の確認も行いました。

又、今冬の県下の野鳥生息状況について情報交換が行われ、ガン・カモ・ハクチョウ一斉調査の結果報告・オジロワシ・オオワシを中心とする猛禽類の出現状況など、大変参考になる情報を得ることができました。

午後2:00の閉会まで、出席者 名は、大変有意義な日をすごすことができたと思います。

＝確認した鳥＝

カイツブリ・アカエリカイツブリ・ハジロカイツブリ・ウミウ・クロガモ・ビロードキンクロ・シノリガモ・マガモ・カルガモ・コガモ・オナガガモ・ウミアイサ・カワアイサ・ミツユビカモメ・ユリカモメ・カモメ・ウミネコ・セグロカモメ・オオセグロカモメ・シロカモメ・ダイサギ・トビ・ハクセキレイ・セグロセキレイ・イソヒヨドリ・カシラダカ・スズメ・ハンブトガラス・ハンボソガラス

以上 29種

(文責 岡田)

